

比較文化研究 No.106, 2013抜刷

防災意識の語用論：反復がまねく危機感の喪失について

塩 田 英 子
(同志社大学)

2013年3月31日

日 本 比 較 文 化 学 会
The Japan Association of Comparative Culture

防災意識の語用論：反復がまねく危機感の喪失について

塩 田 英 子
(同志社大学)

Repetition in Emergency Situations from Relevance Theoretical Perspective

Eiko SHIOTA
Doshisha University

Abstract

The Great East Japan Earthquake had a substantial impact on various academic disciplines. Some have been forced to undergo a drastic revision, and others have received focuses because of their usefulness in emergency situations. One of the latter is the linguistic approach to emergency communications. For example, pragmatic analyses from relevance theoretical perspective, such as Arai (2011, 2012a, 2012b) and Sugihara (2012), suggest what type of communication is effective and needed in such situations.

This paper is based on the survey on consciousness of disaster prevention conducted for 384 students at six universities in Kyoto Prefecture from October 22 to November 22, 2012. The result shows that many subjects are lack of knowledge of disaster prevention although they have taken part in disaster drills many times. This tendency can be accounted for by the effects of repetition proposed by relevance theory. Repetitions, if they work well, can strengthen input stimulus in which they are included. The process needs, however, more efforts than that of non-repetitive expressions. For this, it is possible that receivers give up interpreting the repetitive expression itself, leading their inferential focuses to higher level explicatures instead. At the end of the paper, an effective remedy will also be discussed.

1. はじめに

東日本大震災以来、自然災害に対する関心はこれまでになく高まっている。たとえば言語研究の

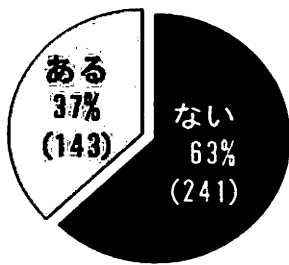
分野では、関連性理論 (Relevance Theory) の立場から、新井 (2011、2012a、2012b) や杉原 (2012) が緊急事態においてどのような伝達スタイルが有用であるかについて考察している。本稿では、このような試みの一環として、緊急事態におけるコミュニケーションが円滑に進められるために必要となる、防災意識に焦点をあてる。そして、形骸化した防災訓練の繰り返し、防災意識の希薄化、さらには危機感の喪失につながっていく仕組みを、関連性理論の観点から分析したい。

2. 防災意識の傾向と問題点

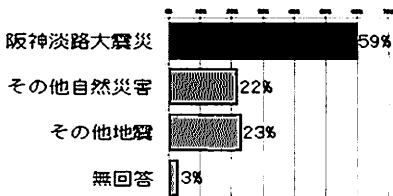
2.1. 防災意識アンケートと回答者の特徴

まず、防災意識の傾向をさぐるために行ったアンケートを概観しておきたい。実施期間は2012年10月22日から11月22日の1ヵ月間、対象は京都府内にキャンパスを構える6大学に通う大学生男女である。最終的には男性218名、女性166名、合計384名からの回答が得られた。

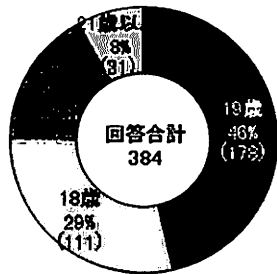
今回実施した防災意識アンケートの回答者の特徴としてあげられるのは、多くが自然災害に対する実感に乏しいという点である。たとえば、【図1】に示すように、回答者のうち63%は被災経験がないと答えている。残り37%の回答者は被災経験があると答えたが、【図2】に示すように、被災した災害として阪神淡路大震災をあげていた。



【図1】 自然災害（地震・津波・豪雨・洪水など）の被災経験はありますか。（二択式）

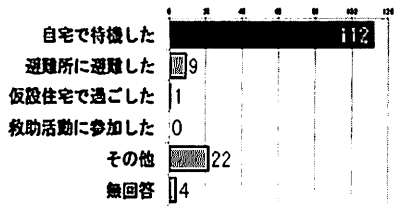


【図2】 被災したのはどんな自然災害ですか。（記述式）



【図3】 回答者の年齢

しかし、【図3】にある年齢の内訳をみると、回答者の多くは阪神淡路大震災が起こった1995年当時は乳幼児であった。さらに、【図4】から、被災経験も自宅待機が大半を占めている。これらのことから、今回の調査の対象となった回答者は強く実感できる形での被災経験がない集団ととらえることができる。



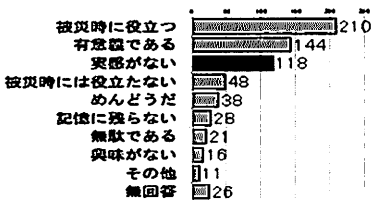
【図4】 被災したときあなたはどんな経験をしましたか。（記述式）

2.2. 防災活動の傾向と問題点

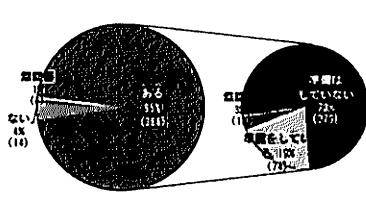
上記のような特徴をもつ回答者による防災意識アンケートの結果を動機づけ、能動性、定着の3つの観点からまとめると以下ようになる。

- (1) a. 動機づけ：被災経験が乏しく、防災訓練に参加しても実感を得にくい。
- b. 能 動 性：防災知識が避難場所の確認など、実際の防災行動につながりにくい。
- c. 定 着：防災訓練に参加しても得た知識が具体的な記憶として定着しにくい。

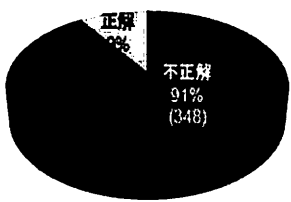
まず、(1a)については、先に挙げた回答者の傾向に加え、【図5】に示すように、防災訓練に対して「実感がない」という回答が3番目に多く118得られた。この数は、防災訓練を受けたことがあると答えた回答者366人のおよそ3分の1にあたる。このことから、防災訓練から防災に関する知識を得るための動機を得にくい環境にあるということがわかる。また、(1b)の能動性については、【図6】に示した通り、防災訓練を受けていても災害発生時への備えを行っていない回答者が73%いた。避難行動についても、「あなたは今、この瞬間に大きな揺れを感じました。まずどんな行動をとりますか。(記述式)」という設問に続いて、「間もなくして避難を促す放送が流れました。あなたはどこに避難しますか。(記述式)」という設問がなされると、9割以上の回答者は自らのいる場所(大学の教室)から一番近い避難場所を言い当てることができなかった(【図7】)。このことは、日常生活において自然災害にあうことが想像できないという(1a)を示すと同時に、避難場所の確認といった(1b)のような防災行動への能動性が低いことのあらわれでもある。



【図5】防災訓練に関するあなたの考えを教えてください。(複数選択式)

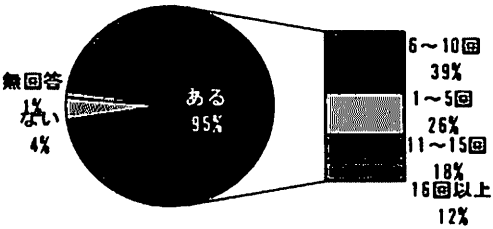


【図6】防災訓練の経験と被災時への備え



【図7】実際に指定されている避難場所を正しく答えた割合

また、(1c)については、【図8】からわかるように、回答者のほとんどが防災訓練を複数回受けたことがあるにもかかわらず、【図6】のように、防災行動に出ていない。これは複数回訓練が行われても具体的な知識として定着していないことを示している。



【図8】防災訓練の経験の有無と経験の回数

(1a) 動機づけ、(1b) 能動性、(1c) 定着に共通しているのは、回答者が防災知識を身につける際のきっかけとして防災訓練があまり役に立っていないという点である。防災意識を高め、災害発生時の適切な行動を促すことを目的に行われるはずなのに、なぜ、防災訓練によって防災意識を向上させることができていないのだろうか。関連性理論に基づく観点から、その原因を探っていきたい。

3. 防災意識と関連性

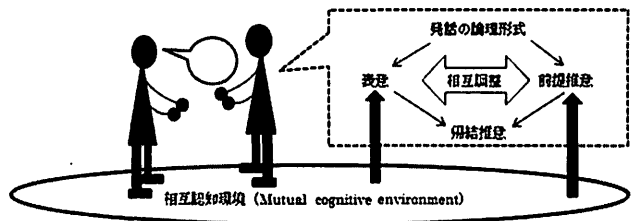
3.1. 関連性の原則と相互認知環境

関連性理論によると発話をはじめとする刺激は入力後、推論モデルと呼ばれる解釈のプロセスを経て解釈される。

たとえば、「今すぐ、ここから避難せよ」という警告が発せられたとする。この場合、「今すぐ、ここから避難せよ」という発話の論理形式

をもとに表意の形成が行われる。現在の関連性理論の立場では、表意形成には(3)に示す4つの語用論のプロセスがかかわると考える(東森・吉村 2003: 34)。

(2) 関連性理論による解釈のプロセス



(3) 表意の復元にかかわるプロセス

- a. 一義化 (disambiguation, 多義語の意味の特定): 避難せよ ≠ 非難せよ
- b. 飽和 (saturation, 発話の命題形式によって要求される指示対象の特定):
今 = 午後2時30分、ここ = 教室
- c. 自由拡充 (free enrichment, 解釈に必要な語用論的要素の拡充):
「グラウンドへ」、「走らず速やかに」
- d. アドホック概念形成 (ad hoc concept construction, 一時的な語彙概念の形成): なし。

ここでは、(3d) アドホック概念形成以外のプロセスが用いられ、最終的に「午後2時30分に、教室からグラウンドへ走らず速やかに避難せよ」という表意が復元される。そして、この表意に認知環境から呼び出された想定(前提推意)が組み合わさり解釈(帰結推意)が導き出される。

(4) 表意: 午後2時30分に、教室からグラウンドへ走らず速やかに避難せよ。

前提推意: 先ほどひじょうに強い揺れを感じた。

帰結推意: 急いでグラウンドまで走らず速やかに避難しなければならない。

このような発話解釈のプロセスを支えるのは（５）の関連性の原則（Principle of relevance）である。

（５）*Principle of relevance*

Every act of ostensive communication communicates a presumption of its own optimal relevance. (Sperber & Wilson 1995 : 158)

関連性の原則によると、何かを伝えようとして発せられた刺激（every act of ostensive communication）は、解釈するように努めれば、その労力に見合っただけの効果が得られるという前提（a presumption of its own optimal relevance）でコミュニケーションが行われる。このルールに従い、受け手は刺激を推論にかけ、労力に見合っただけの認知効果が得られたと判断する時点まで労力を費やし、解釈を試みる。

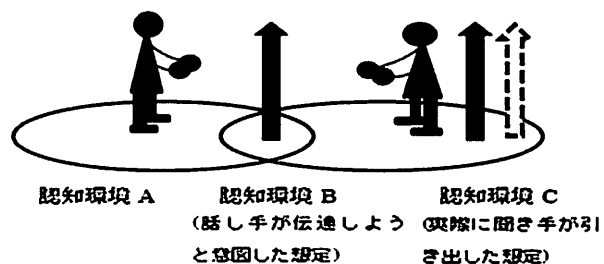
しかし（３c）の自由拡充によって補われる情報は防災訓練などによって得た、防災行動に関する情報である。この情報が記憶として定着しておらず、認知環境において顕在化できなければ適切な避難行動に出ることはできない。つまり、受け手は関連性を達成することができない。このように、日常のコミュニケーションでは話し手が伝えようとした意図が必ずしも受け手に伝わるとは限らない。関連性理論を用いて翻訳を分析した Gutt (2000) は、話し手と受け手の認知環境の違いによって誤解が起こるような事態を二次的伝達状況（secondary communication situations）と呼んだ。

（６）... it can happen—for various reasons—that in interpreting a text an audience may fail to use the contextual assumptions intended by the communicator and perhaps use others instead. Such situations we shall refer to as *secondary communication situations*, and in most cases they will lead to misinterpretations. (Gutt 2000 : 76)

話し手は受け手が相互認知環境にあると考えていて、その相互認知環境の中から望んだ通りの想定を呼び出し、発話を解釈してほしいと望んでいる。しかし、二次的伝達状況においては、受け手は話し手とは違う認知環境にあるために、話し手の意図とは違う想定を呼び出すか、さらには、想定自体を呼び出せないこともある。このような状況を図示すると、以下のようになる。

（７）二次的伝達状況

(secondary communication situations)



ここで先の「今すぐ、ここから避難せよ」について考えてみたい。受け手が避難先や避難方法などの防災に関する情報を補えていない場合、表意は「午後2時30分に、教室から避難せよ」となる。この表意には場所や方法などの自由拡充されるべき情報が含まれていない。その結果、適切な避難行動をとることはできない。また、認知環境Cのようになれば誤った想定を呼び出すことにより命を危険にさらすこともある。このような事態に陥らないために、防災訓練の繰り返しにより知識の定着をはかるのであるが、先のアンケート結果からうかがえるように、成功しているとはいいがたい。次の部分ではその理由を反復が解釈プロセスに与える影響に求めていく。

3.2. 反復と関連性

関連性理論による反復の位置づけは(8)のようにまとめることができる。

(8) Sperber & Wilson (1995) による反復のとらえ方

- a. 反復は強調の効果をもつ。
- b. 強調は表意・推意の両方のレベルで起こる。
- c. 強調に関わる推意には「単一の強い推意」と「複数の弱い推意」の2種類がある。

たとえば、(8b)の表意のレベルにおける反復について、以下のような例があげられる。

(9) a. Here's a red sock, here's a red sock, here's a blue sock.

b. I shall never, never smoke again. (Sperber & Wilson 1995 : 219)

(9) はいずれも表意・命題内容に影響を及ぼす反復の例である。たとえば、(9a)は反復によってくつ下の数が2枚であることを示し、命題形式を“Here are two red socks…”と言い換えることができる(Blakemore 1993 : 114)。また、(9b)の例については、“never”を反復することによって、“never”に対する強い確認値を与え、“definitely never”と言い換えることが可能である(Sperber & Wilson 1995 : 221)。しかし、反復による強調は、常に言い換え可能な表意のレベルで起こるとは限らない。

(10) a. There's a fox, a fox in the garden.

b. My childhood days are gone, gone. (Sperber & Wilson 1995 : 219)

(10)は、(9a)や(9b)とは違い、推意のレベルに関わる強調の例である。たとえば、(10a)の場合、(9a)のように、“There are two foxes in the garden.”ということを表しているのではない。「キツネは鶏を襲う」という基本的な事実と「庭にニワトリがいる」などの複数の想定により「ニワトリに危険が迫っている」という単一の強い推意(strong implicature)を帰結推意としてうみ出すと考えられている。

これに対して、(10b) は、若い頃が遠ざかるとはどういうことを考えさせる過程で、複数の前提推意を呼び出す。(9b) のように “My childhood days are definitely gone.” と言い換えることはできない。これら複数の前提推意からさらに複数の弱い推意 (weak implicature) を帰結推意として導き出していく。たとえば、Pilkington (2000) は、(10b) との関連で呼び出される前提推意として (11) を、帰結推意として (12) をそれぞれあげている。

- (11) a. Childhood days are innocent.
 b. Childhood days are ingenuous
 c. Childhood days are carefree. (Pilkington 2000 : 126)
- (12) a. The speaker's days of innocence are gone.
 b. The speaker's days of ingenuousness are gone.
 c. The speaker's carefree days are gone. (Pilkington 2000 : 126)

このように、(10b) の反復がもたらす効果は単一の命題として表現できない数多くの感情や共感であるため、詩的效果 (poetic effect) とも呼ばれる。

(10) に示した例はいずれも推意に関わるので、それなりの効果が得られるとはいえ、読者に課す労力は大きい。しかし、(13) に示すように処理労力が小さければ小さいほど個人にとっての関連性は高くなり、コミュニケーションは円滑に進む。

(13) *Relevance of a phenomenon* (comparative)

Extent condition 1: a phenomenon is relevant to an individual to the extent that the contextual effects achieved when it is optimally processed are large.

Extent condition 2: a phenomenon is relevant to an individual to the extent that the effort required to process it optimally is small. (Sperber & Wilson 1995 : 153)

(14)

反復の種類	表意にかかわる反復	推意にかかわる反復
処理労力	小	大
関連性	高	低

(14) から緊急時のコミュニケーションで行われる反復は、本来、処理労力が小さく関連性の高い、表意の復元に関わるものが適切であるといえる。これは受け手が限られた時間の中ですみやかに行動せねばならない状況、つまり緊急事態に置かれているからである。しかし、受け手が防災知識を持ち合わせておらず、二次的伝達状況に陥ったために、表意がうまく復元できずに推意にかかわる情報として反復が伝わる事態も起こりうる。次節では、ミクロとマクロ2つのレベルから災害時のコミュニケーションにかかわる反復について考えてみたい。

由拡充することができない。受け手は自らの認知環境から表意を補う情報ではなく、前提推意しか呼び出すことができないからである。さらに、サイレンは解釈を待たず、すぐに次の刺激が与えられる。その場合、否定的な前提推意を複数同時に呼び出すことで危機意識の増大が起こり、不安感が解消されることなく増大するいっぽうである。その結果、受け手は混乱をきたす。たとえば、(18)は大洗町で実際に発令された避難サイレンに対する住民の反応である。

- (18) 住民にはサイレンのことを印象深く語る人が複数いた。「サイレンは相当すごかった。気味が悪いくらいに聞こえた。聞こえなかった人はいないはず」(女性 (64))。「サイレンも鳴って、ふだんと違う感じがした」(男性 (67))。「呼びかけに加えてサイレンが鳴って、『怖いな』と思った」(男性 (71)) など、サイレンでふだんと異なる状況にあることに気付いたと語る人が何人もいたのである。[下線引用者] (井上 2011 : 47)

大洗町ではこのサイレンが効果的に用いられ、住民に対して適切な避難を促すことができた。これは住民が日ごろから防災に対する意識が高く、サイレンが避難場所などの知識の呼び出しと結びついた結果である。しかし、防災知識を持ち合わせていない受け手にとっては、(17) に示したような複数の弱い推意を呼び出すだけである。その結果、いつまでたっても必要な表意が引き出せない不安とそれに起因する否定的な推意の呼び出しを繰り返すことにより不安感が増大するのである。

さらに、防災知識の欠如から、サイレンの意味を解釈できないのでサイレンを無視したいと考える受け手がいることも考えられる。しかし、関連性の原則により受け手は解釈を強いられる。そのような場合、サイレン自体の解釈を放棄した受け手の推論はより高次の表意 (higher level explicature) へと向かう。たとえば、津波警報の高次表意について、杉原 (2012) は以下のような例をあげて説明している。

- (19) 宮城県では6メートルの津波が到達すると予想されています。(杉原 2012 : 36)

- (20) a. 宮城県では6 mの津波が到達すると気象庁によって予想されている (補完された表意)。
b. アナウンサーは「宮城県では6 mの津波が到達すると気象庁によって予想されている」ことを伝えている。
c. アナウンサーは「宮城県では6 mの津波が到達すると気象庁によって予想されている」ことを確実な予想だと信じている。
d. アナウンサーは「宮城県では6 mの津波が到達すると気象庁によって予想されている」ことを重大視している。(杉原 2012 : 37)

杉原 (2012) によると、報道の文体では通例 (20a) が用いられるという。しかし、受け手自らに理解できないサイレンを吹鳴し続けられた結果、受け手が解釈の放棄を求めると否定的な高次表意が呼び出される可能性がある。

- (21) a. 消防はサイレンを鳴らして誇張している。
b. 消防はサイレンを鳴らして嘘をついている。

このように考えると、井上（2011：44-6）がいう、災害発生時に被災者に芽生える正常化の偏見やオオカミ少年効果といった心理効果も高次表意と関係しているにとらえることが可能である。さらに、緊急時における情報の反復について、新井（2011、2012a）は以下のように述べている。

- (22) 短い間隔で5度、6度と繰り返されると認知効果は減っていき、関連性が低くなるため、視聴者は注意を向けなくなってくる。[下線引用者]（新井 2011：11）

- (23) 3月11日以降余震が続き、あまりに同じ放送が繰り返されたため、徐々に慣れてしまい、すぐに動こうとはしなくなってしまう人も多いであろう。このような現象は、関連性理論の説明によれば、認知効果の減少、つまり、関連性の低下が原因で起きるものである。[下線引用者]（新井 2012a：35）

これらの点も本来求められる表意の復元ができないがために、関連性を求める受け手が推意、ひいては高次表意へと解釈の方向付けをされることで説明できる。結果、複数の否定的な弱い推意を呼び出したり、弱い推意を呼び出す労力を放棄したりすることで否定的な高次表意の形成へと方向づけられた可能性もある。

4.2. マクロレベルでの反復

次に長い時間でみた場合の反復について防災訓練の繰り返しとその形骸化について考えてみたい。まず防災訓練では実際の災害発生時とは違い、反復によって弱い推意（この場合は不安感）がうみ出されない。訓練の参加者は表意を適切に形成できなくても命の危険にさらされることはないといわれているからである。さらに、推論しなくても後続する放送や周囲のとり行動、教員の指示など、新たな刺激が与えられるのをただ待つという状況になる。このようにして訓練の参加者は場当たりの避難行動に出る可能性がある。この繰り返しが防災訓練の形骸化につながっていく。

また、さらに、訓練であるという前提が与えられているがために、表意の復元自体を放棄し、高次表意のみを解釈（帰結推意）として導き出す事態も起こりうる。

- (24) 刺 激：サイレン
表 意：すみやかにA小学校へ避難せよ。
前提推意：防災訓練が行われている。
帰結推意：消防は嘘をついている。

それでは、防災知識を定着させ、即座に必要な情報を引き出すよう促すにはどうすればよいのだろう

うか。Gutt (2000) は (25) (26) で二次的伝達状況における「伝達の手がかり (communicative clues)」について述べている。

(25) ... one might well argue that the point of preserving stylistic properties lies not in their intrinsic value, but rather in the fact that they provide clues that guide the audience to the interpretation intended by the communicator. We shall refer to such clues as *communicative clues*. (Gutt 2000 : 134)

(26) ... it seems very suitable for the preservation of stylistic features in that communicative clues reflect not only the information content of what was said, but also the way in which it was expressed and the special effects that such stylistic features would achieve. (Gutt 2000 : 135)

「伝達の手がかり」とは、話し手が意図した解釈に受け手の解釈を近づけるための一手段であるともいえる。そして、この手がかりは内容だけではなく、スタイルの問題にも関わる。では防災訓練における伝達の手がかりとは何なのだろうか。これは情報内容だけではなく情報内容の発せられ方でもある。井上 (2011) が取材した大洗町は4メートルの津波に襲われながらも、津波による死者はひとりもいなかった。これは、普段は使わない表現を災害無線放送で使ったことが功を奏した結果であるという (井上 2011 : 32)。つまり、「訓練時に使う表現」と「災害発生時に使う表現」をわざと分けることで危険を強く知らせることができたといえるだろう。

ただし、このような表現を用いれば必ずしも効果があるかといえば、そうではない。東日本大震災からおおよそ1年9ヵ月後、2012年12月7日に東北地方を強い余震が襲った。その際に用いられた「東日本大震災を思い出してください」という強い警告が何度も繰り返されたことに対してはさまざまな意見が交わされている。この表現によってかつての惨事を思い起こし、避難が必要だと強く感じる受け手もいれば、不安や悲しみなどの感情が呼び起こされる可能性もある。また、防災意識の強い受け手ならば強い口調で誇張していると解釈することもあるだろう。これは受け手の認知環境がそれぞれ異なっているために起こる。しかし、発信者は情報を有していない受け手に限られた範囲での相互認知環境で、二次的伝達状況に陥らないために情報を発信しなくてはならない。評価はどうであれ多様な受け手に対応するための出発点となったことは確かであろう。

5. おわりに～防災から減災へ～

「防災」という強い前提に基づき、有事さながらの訓練を行うことが、かえって実際の避難行動の妨げになることがある。これは災害発生時を強く想定した訓練であるから実際に被災したときも訓練と同じ感覚を持ってしまうからでもある。

(27) 防災は被害＝0のときにのみ成り立つ概念である。これは不可能であり、災害を完全に抑え込もうとしてはいけないし、また抑さえ込めるはずもない。被害をできる限り小さくする努力、つまり減災の概念が重要になってくる。(溝口 2011: 34)

(27) は「防災」とは何か、考える際に多くのことをおしえてくれる。「減災」という概念は防災訓練はもとより、実際の避難行動でも役立つ。たとえば、先にあげた体験型・能動型訓練を行い、その段階では「減災」を意識した指示を積み重ねることで災害発生時の「防災」無線を際立たせ、効果を増大させることができる。

(1) であげた防災意識の問題点に対応する形として、(29) を示しておきたい。

(26) 動機づけ：体験型訓練、体験談による文脈効果の強化。

能 動 性：参加者自らが誘導の立場（表意の復元を強制される立場）につく訓練の実施。

定 着：動機づけ、能動性の強化による長期的展望での改善。

もちろん、このような情報を適切に利用するためには受け手の側にあらかじめ防災知識が定着していなければならない。効果的な防災知識の反復と定着が必要であることはいうまでもない。

最後に、今回アンケート調査をおこない、防災意識の傾向を観察するうえで改めて気づかされた点がいくつかある。そのひとつとしてあげられるのは、回答者の中に視覚障がい者や外国人留学生が含まれていたという点である。これらの回答者は数の少なさを理由に、無視してはいけない存在である。ひとりでも多くの人命を救うために、これからもさまざまなレベルでの二次的伝達状況における防災を考えていく必要があると思われる。

※本稿は2012年12月18日（土）に同志社大学新町キャンパスにおいて開催された日本比較文化学会関西支部・関東支部合同例会での発表に加筆・訂正を施しまとめたものである。

参考文献

- Blakemore, Diane. (1993) "The Relevance of Reformulations," *Language and Literature* 2, 101-120.
- Carston, Robin. (2002) *Thoughts and Utterances: The Pragmatics of Explicit Communication*, Blackwell Publishing, Oxford. [内田聖二ほか訳『思考と発話：明示的伝達の語用論』東京：研究社、2008.]
- Gutt, Ernst-August (1998) "Pragmatic Aspects of Translation: Some Relevance-Theory Observations," *The Pragmatics of Translation*, ed. by Leo Hickey, Multilingual Matters, Clevedon / Philadelphia / Toronto / Sydney / Johannesburg, 41-53.
- Gutt, Ernst-August (2000) *Translation and Relevance: Cognition and Context*, St. Jerome Publishing, Manchester & Boston.
- Pilkington, Adrian (2000) *Poetic Effects: A Relevance Theory Perspective*, John Benjamins, Amsterdam / Philadelphia.
- Sperber, Dan and Deirdre Wilson (1995) *Relevance: Communication and Cognition*, 2nd ed.,

- Blackwell Publishing, Oxford.[内田聖二・中逵俊明・宗南先・田中圭子訳『関連性理論：伝達と認知』東京：研究社、1993.]
- Wilson, Deirdre and Tim Wharton (2009) *Recent Advances in Pragmatics*. [今井邦彦編『最新話用論入門12章』東京：大修館.]
- 新井恭子 (2011)「緊急事態におけるコミュニケーションー避難命令の伝え方を考える」『経営論集』78号、東洋大学、27-38.
- 新井恭子 (2012a)「東日本大震災後の公共コマーシャル連続放送の問題について一言語学のコミュニケーション理論『関連性理論』の視点から」『日経広告研究所報』263号、10-14.
- 新井恭子 (2012b)「緊急事態と非常事態における情報伝達ー関連性理論におけるコミュニケーションの効率性」『日本語用論学会第14回大会発表論文集』第7号、1-8.
- 井上裕之 (2011)「大洗町はなぜ『避難せよ』と呼びかけたのかー東日本大震災で防災行政無線放送に使われた呼びかけ表現の事例報告」『放送研究と調査』NHK、32-53.
- 今井邦彦・西山佑司 (2012)『ことばの意味とはなんだろう：意味論と語用論の役割』東京：岩波書店.
- 長岡京市役所情報管理課編 (2012)『広報長岡京』2012年12/1号、長岡京市役所.
- 杉原満 (2012)「津波避難呼びかけ表現の課題ー関連性理論を中心とした分析」『放送研究と調査』NHK、28-45.
- 東森勲・吉村あき子 (2003)『関連性理論の新展開：認知とコミュニケーション』東京：研究社.
- 溝口晃之 (2011)「正しい防災意識を育成する防災教育」『地理学報告』第111号、愛知教育大学地理学会、33-38.

(同志社大学嘱託講師)